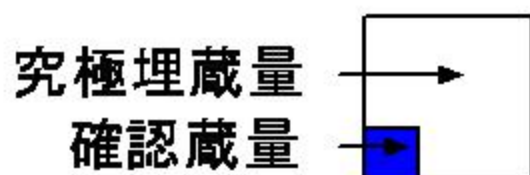


凡例

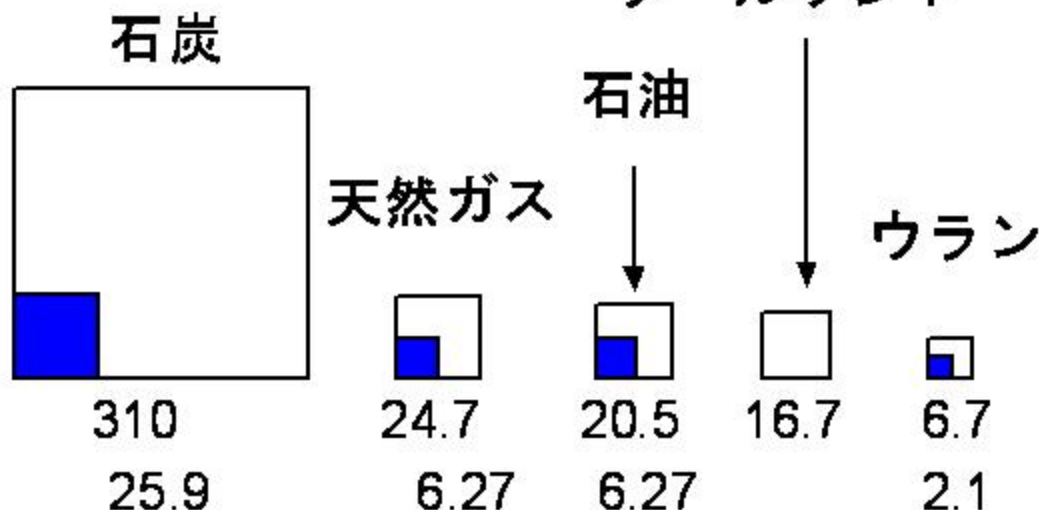


世界の年間

総エネルギー消費

↓
0.4

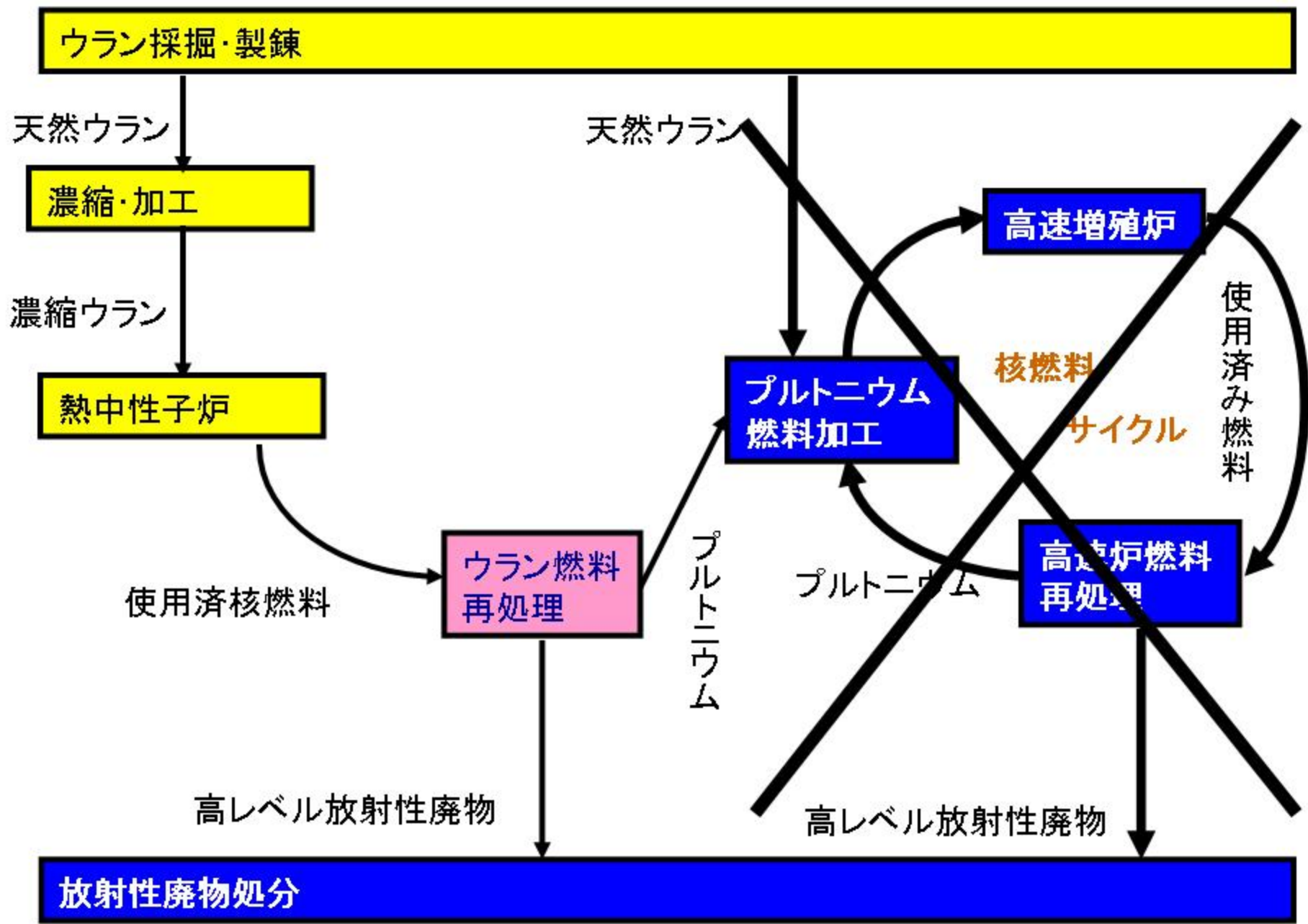
オイルシェール タールサンド



再生不能エネルギー資源の埋蔵量

数字の単位は10x10²¹J

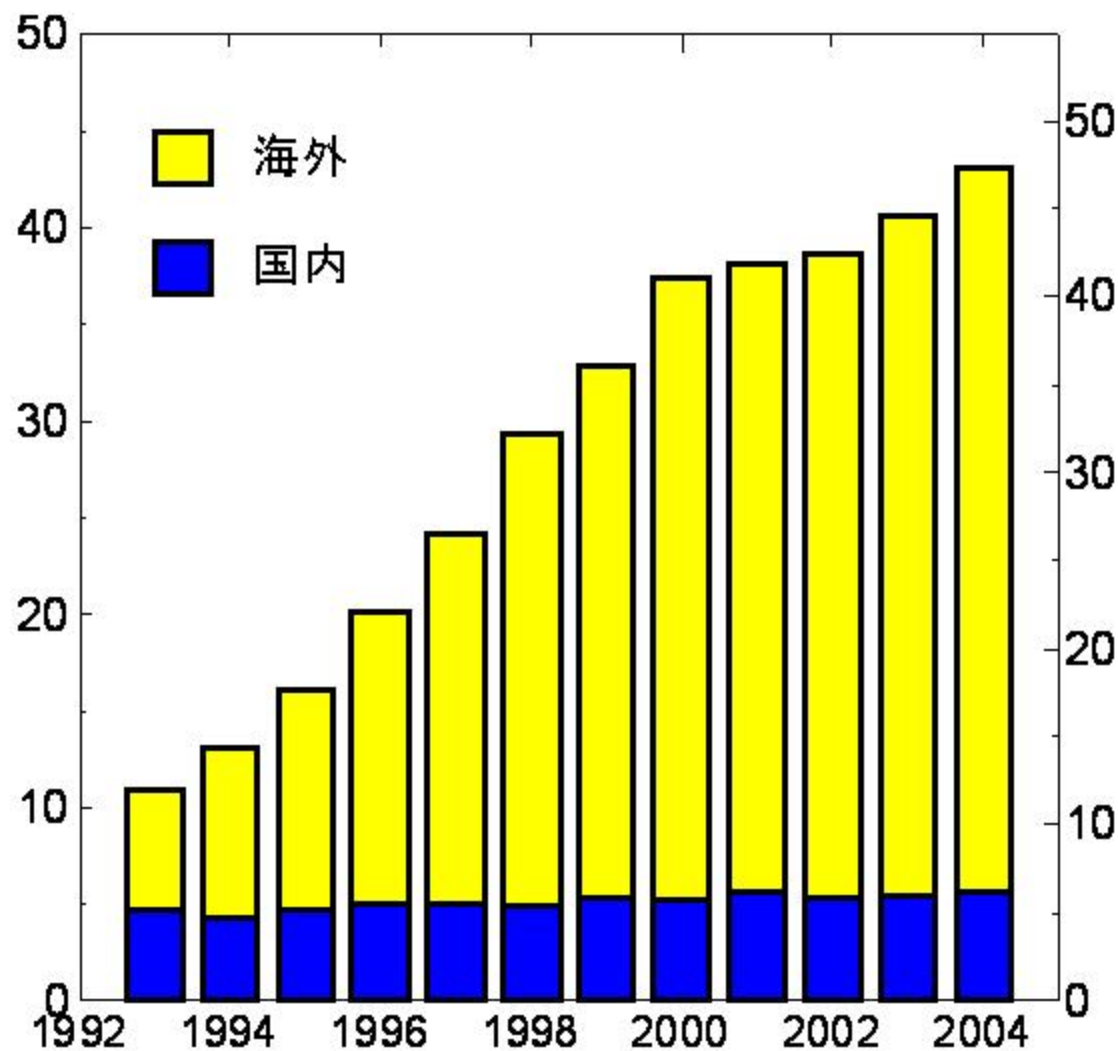
上段が「究極埋蔵量」、下段が「確認埋蔵量」



[トン・分離プルトニウム]

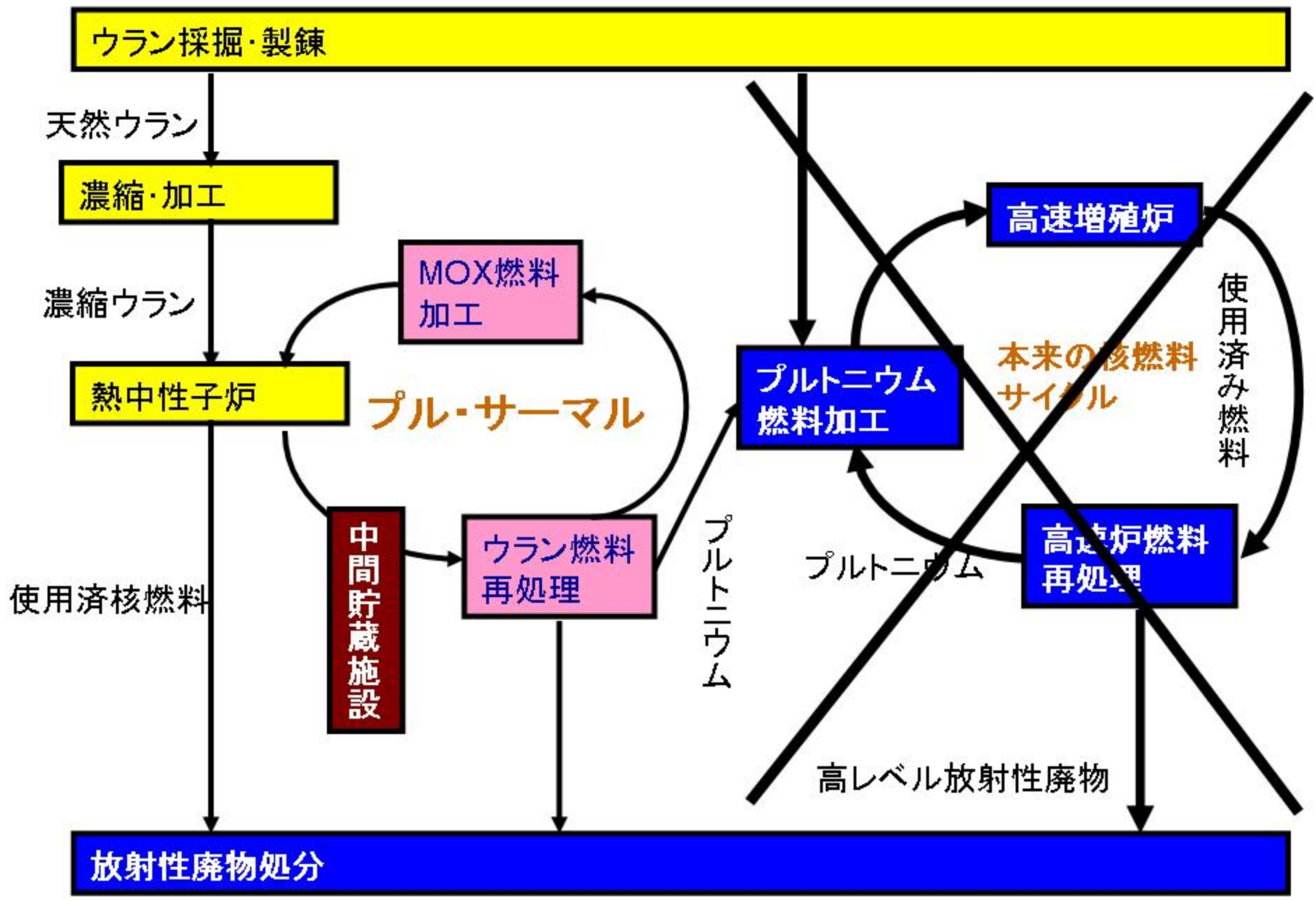
[メガトン・原爆]

日本のプルトニウム保有量



日本の分離プルトニウム保管状況

長崎原爆(21kt)が13kgのプルトニウム²³⁹で製造されていたとし、保管中の分離プルトニウムの68%が核分裂性であると仮定した。





国の原子力政策の破綻

そのツケを

安全性を犠牲にし

経済性を犠牲にし

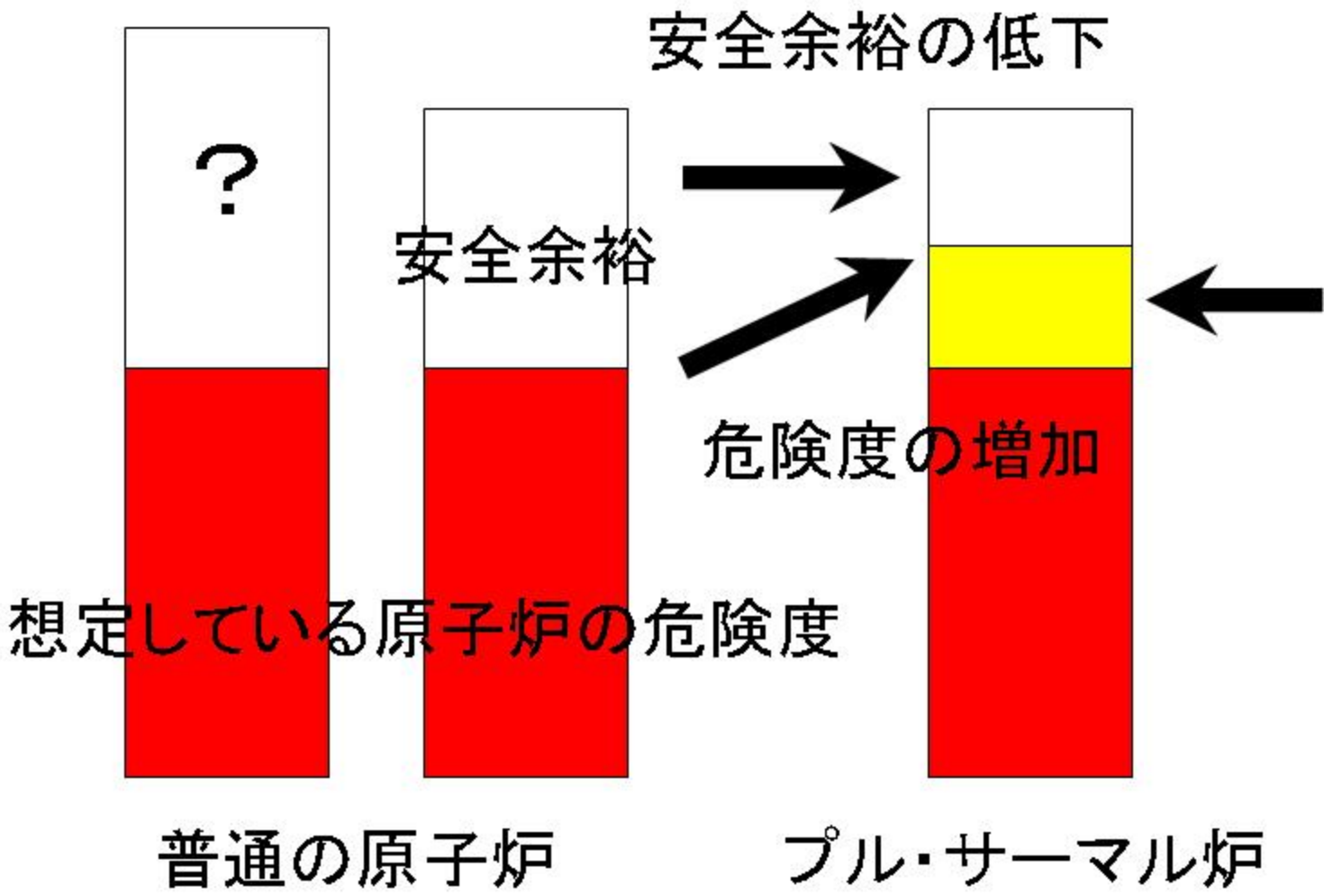
資源的にも意味がない


プルサーマルに求めようとしている

食いつぶされる安全余裕


工夫で頑張る？

本当の危険はもっと大きいかもしれない！
だから、普通の原子炉でも事故が起きる。





Q: MOX燃料はウラン
燃料より低い温度で
溶けて危険性が増す
と言われていますが、
大丈夫ですか？



なかなか正直！

ウランにプルトニウムを混ぜると、
溶融点（溶け出す温度）は、混ぜた
プルトニウムの量に応じて低くなります。

したがって、玄海3号機で使用するMOX燃料ペレットの場合、溶融点はウラン燃料よりも70°Cほど低い約2,720°Cとなります。



これが回答か？！

A: MOX燃料ペレットの溶融点は約2,720°Cですが、出力が異常に上昇する場合でもペレットの最高温度は約2,250°Cまでしか上がらないため、MOX燃料のペレットが溶けることはありません。

2000年度の「原子力安全白書」

多くの原子力関係者が「原子力は絶対に安全」などという考えを実際には有していないにもかかわらず、こうした誤った「安全神話」がなぜ作られたのだろうか。その理由としては以下のような要因が考えられる。

- ・ 外分野に比べて高い安全性を求める設計への過剰な信頼
- ・ 長期間にわたり人命に関わる事故が発生しなかった安全の実績に対する過信
- ・ 過去の事故経験の風化
- ・ 原子力施設立地促進のためのPA(パブリックアクセプタンス=公衆による受容)活動のわかりやすさの追求
- ・ 絶対的安全への願望



国が行う災害評価

重大事故 : 技術的に考えて起こる事故

仮想事故 : 技術的に起こらないが、念のために考える事故

どちらの事故でも格納容器は壊れない

格納容器が壊れるような事故は

「想定不適當事故」